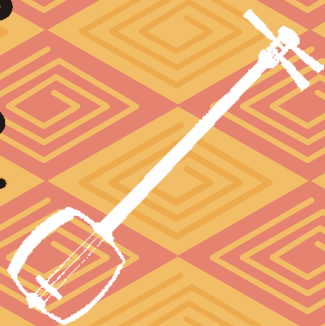


盛岡芸妓

ものがたり

morioka-geigi story



平成版 花舞台千代顔見

わざをぎの陸の奥なる盛岡に
くだり初にし延寶の二季きさらぎ中旬とかや
桐の一座を打ちつれて新丸御殿に初めみえ
梅に桜に桃の花里に名を得し山吹も
なべて咲せし狂言つくし
君の詠ぞかしこれかしこれ
静が思ひの通じてや
天和二季の卯の花月に
八幡の神の廣まへをかざる
榊の坂下に建てし舞台の初見草
昔をしのぶ今村が一座の振事見そめしより
二百年の定舞台それもいつしか夢のあと
たえて長夜の菊見月また咲かへる
大正のしかも二季に延季の
四つ花菱の松本が一座をここにむかひ鶴
時はうつりて平成の世も治まりて百歳を
今に重ねて集いてや舞うて唄いて目出度くも
末ひろがりの三つ銀杏
千代に常盤と祝しける

盛岡芸妓ものがたり

【解説】

「花舞台千代顔見」は、大正二年の盛岡劇場の舞台開きで演じられた浄瑠璃。当時招かれた七代目松本幸四郎が盛岡芸妓と共に披露しています。作詞は鹿中庵不染（橋正三）、作曲は二代目常磐津文字兵衛、振付けは七代目松本幸四郎。盛岡劇場にとって実に貴重な舞台です。同年、盛岡劇場が発行した「花舞台千代顔見」に詞はありますが、当時は口承によって受け継がれるのが一般的であり、曲や振付けの正式な記録は残っていません。平成25年9月、盛岡劇場開場100周年記念として「平成版 花舞台千代顔見」を上演するにあたって、人間国宝である常磐津英寿師に補作・作曲を、日本舞踊若柳流四代目家元・若柳壽延師に振付けを依頼。英寿師の計らいで、当初の「花舞台千代顔見」に百年の時の流れを重ねた歌詞を加え、平成版として装いを新たに作られたのが「平成版 花舞台千代顔見」です。

盛岡芸妓とは、踊りや長唄、常磐津などの芸ことを身に着け、お座敷などで芸の披露とおもてなしを行う女性のことです。しかもその芸は明治41年の東北6県連合共進会演芸の部で優勝しているほどで、全国的にもレベルが高いことで知られています。ここではそんな盛岡芸妓の歴史や伝統芸、一人前の芸妓をめざす「ひよ妓」二人をご紹介します。盛岡芸妓が盛岡の「宝」であることを感じてもらいたいと思います。

盛岡芸妓の歴史

◆幡街芸妓と本街芸妓

かつて八幡町と本町はそれぞれ幡街、本街とよばれる花街で、盛岡芸妓は幡街芸妓と本街芸妓に分かれていました。幡街の料亭は主に商家のどんな衆が、官庁街の本街の料亭は主に役人や政治家が利用していたことから、幡街芸妓と本街芸妓は氣質も違い、ともに芸を競い合っていたと言われています。ちなみに明治44年正月の新聞広告によると、幡街芸妓は54人、本街芸妓は41人で、料亭の数は河南地区で11軒、河北地区で19軒あったようです。八幡町には遊郭もありましたが、盛岡芸妓はそこでの遊女や酌婦とは一線を画し、身持ちが固く品格が高いということでした。

それぞれの街には、芸妓を登録管理する事務所

です。函番は宴席への手配のほか、料金(玉代)の精算、お稽古事や「温習会」とよばれる芸の発表会の世話なども取り仕切っていました。

◆朝から夕方まで稽古に励む

盛岡は昔から芸事が盛んで、特に八幡町や本町には料亭のほか、長唄や踊りなどを教えてくれる師匠の家もありました。そこで八幡町や本町で生まれた女の子は、子どもの頃から自然にそれらのお稽古に通って芸を習得。こうして「半玉」「玉代が半分」の意という芸妓の卵の時期を経て、「自前芸妓」になったそうです。

ところがひとくちにお稽古事といっても、長唄、踊り、常磐津、鳴り物(三味線、笛、太鼓、鼓などの総称)と何種類もあります。そのため芸妓を目指す子どもたちの多くは、朝から夕方までお稽古の「しご」をしていたとか。また、数え年の6歳の6月6日にお稽古事を始めると上達する、という故事にしたがって習い始めた子どもも多かったようです。



岩手時事新聞付録より

「函番」があり、芸妓はここを通じて宴席に派遣されました。実はこの事務所は一般的に「検番」または「見番」といわれていましたが、ここには登録されている芸妓の三味線が置かれ、指名された芸妓の三味線を料亭に届ける役目もあったことから、盛岡では三味線の「函(箱)」をとって函番といわれていたそう

こうしたお稽古は芸妓になつてからも続けられましたが、その芸にさらに磨きがかかったのは、常磐津(とぎわづ)林(りん)中(なかつ)との出会いでした。林中は明治25年から28年にかけて盛岡に滞在。その間、盛岡芸妓は常磐津の稽古をつけてもらい、その縁で昭和14年から、芸術院会員で人間国宝の三世常磐津文字兵衛や四代目といった邦楽界の第一人者にも盛岡に出稽古に来てもらっていました。そうした恵まれた環境と芸妓の日々の努力が、「盛岡は関東以北一の芸どころ」という評価につながっていたのです。

◆若柳力代を踊りの師匠に迎えて

その林中の口添えによって明治31年に名古屋から来盛し、盛岡芸妓に踊りを教えるようになったのが、初代若柳力代です。もともと歌舞伎役者だった力代は日本舞踊のほか芝居も教えたので、大正2年に完成した旧盛岡劇場での温習会では、日本舞踊ではなく歌舞伎芝居が披露された時代もありました。ちなみに現在現役の盛岡芸妓は7人ですが、

谷村文化センターでの温習会



温習会



そのうちの一人、よう子姐さんは四代目若柳力代として活躍しています。

そもう一人、林中と関わり、盛岡芸妓の芸の育成と保護に努めたのが、橋正三(ふせん)です。盛岡芸妓の伝統芸のひとつ「金山踊り・からめ節」を作詞したり、常磐津林中の小伝「常磐津林中盛岡掩留記」や「盛岡明治舶来づくし」を書き残した明治・大正の文化人として知られていますが、函番としても盛岡芸妓の芸能振興に力を注ぎました。

◆旧盛岡劇場への想い

このようにさまざまな人たちに支えられて磨かれた盛岡芸妓の芸は、温習会で発表されました。当初会場は函番の2階や料亭の大広間、芝居小屋などでしたが、大正2年に旧盛岡劇場が完成するとそこで行われるようになり、一般市民にも公開されました。そのため温習会は芸妓にとって、日ごろの練習の成果を発表するとともに自分の芸を売り出す大切な場となり、一方の市民にとっても芸妓の華やかな舞台が楽しめる絶好の機会となりました。

な舞台が楽しめる絶好の機会となりました。

この旧盛岡劇場は新しいタイプの芸能娯楽の拠点として東京帝国劇場を模して造られたもので、盛岡初の木造3階建ての建物。設計には、東京駅や岩手銀行中ノ橋支店などを設計した辰野金吾と、彼の教え子で岩手県出身の葛西万司のコンビによる「辰野・葛西建築事務所」がたずさわりました。

劇場の建設や事業運営には当時八幡町にあった料亭「藤家」や「瀬川屋」などが力を尽くし、芸妓も株主となって出資。劇場敷地内にあった「正一位阿国稲荷大明神」は劇場と盛岡芸妓の守り神であったことから、旧盛岡劇場は芸妓たちにとって特別な舞台だったといえます。同神社は新盛岡劇場建設に伴って、市内浅岸の綱取ダム湖畔、やる気村に移転しましたが、平成27年に盛岡八幡宮境内に遷座。28年ぶりに幡街へと戻ってきました。芸能と商売繁盛を願った阿国稲荷神社は昔から八幡地域の人々にとってなじみ深く、現在も多くの人が参拝しています。

ちなみに旧盛岡劇場は昭和32年に谷村文化センターとして生まれ変わり、盛岡芸妓の温習会も引き続き同センターで行われていました。また昭和24年

に始まった盛岡文士劇も8回公演以降は同センターで行われたのですが、その時に芸妓は三味線やお囃子などを担当して文士劇を支えたそうです。

◆園遊会では政府高官を接待

大正2年に完成した旧盛岡劇場は盛岡芸妓の芸道の発展に貢献しましたが、その5年後に総理大臣に就任した原敬は、盛岡芸妓の品格を磨くのに貢献したといわれています。

盛岡出身の原敬は帰省するたびに園遊会を開催しましたが、その接待係として盛岡芸妓は総動員され、「金山踊り」などの芸を披露するほか、政府高官たちの話し相手も務めました。そのおかげで盛岡芸妓の品格が一層磨かれ、また服装なども洗練されたそうです。

盛岡芸妓の芸と品格はその後脈々と引き継がれ、昭和36年に福子姐さんが、49年に都多丸姐さんが市勢振興功労者として表彰されました。ともに盛岡の観光への貢献が評価された結果です。

正一位阿国稲荷大明神





◆としまつりんちゆう
常磐津林申

子どもの頃から芸の習得に励んだ盛岡芸妓ですが、本格的に芸道修業が始まったのは、常磐津林申が盛岡に滞在した明治25年から28年にかけての時期といわれています。

林申は天保13（1842）年、盛岡藩士の石川清蔵の子ともとして江戸で生まれました。しかしその後、父親は盛岡へ単身帰国し、母親は病没。そのため三浦藩士の山陰定次郎の養子になりました。

常磐津を習ったのはそれからで、家元の急死後、未亡人に請われて養子となり六世小文字太夫を襲

名するのですが、家元制度の争いごとに巻き込まれて心傷つき、父親の故郷、盛岡を訪れます。この時行なった興行が大変な評判となり、連日それを見ていた幡街芸妓が常磐津の指導を熱心に頼んだことから、林申による稽古が始まったのです。

林申の稽古は厳しかったそうですが、「九代目市川團十郎をして妙技を演ぜしむるものは林申の咽喉三寸にあり。声さえわたる名人芸」と絶賛された林申から直接手ほどきを受けられたということは、盛岡芸妓にとって幸運なことでした。

また林申は盛岡滞在中、盛岡芸妓のために新曲も作りしました。のちに「花盛岡街賑」と改題された「吾妻土産右手一卜節」の節もその一つです。さらに焼き物づくりや南部鉄瓶などにも興味を持ち、当時函番の帳付けをしていた橘正三と親交を結ぶな

ど、盛岡では心安らかな日々をおくったようです。

しかし明治28年、団十郎から「関の扉」を上演したいが、あなたの常磐津でないと舞台上立てないの東京に戻ってきてほしい」と誘われ、盛岡を離れることになりました。その年の8月には、盛大なお別れ浄瑠璃会が開催されました。

林申の盛岡滞在は、盛岡芸妓だけでなく市民にも常磐津ブームを巻き起こし、常磐津を習う市民が増えたといわれています。一方、林申も明治30年に盛岡で画期的な邦楽公演を開催。これには唄や鳴り物などの高名な師匠も出演したため大盛況で、しかも盛岡芸妓にとっては、その後こうした師匠たちと交流の幅を広げるきっかけになりました。



◆たちばなしやうぞう ふせん
橘正三（不染）

常磐津林申が盛岡に滞在している間に親交を深め

た一人が、橘正三です。正三はもともと巡査をしていましたが、思うところあって辞め、その後は座禅やお茶の道にすみなながら幡街の函番につとめていました。

林申の茶道は南部家に伝わる不白流で、林申はそれを継承する茶人として知られていたほか、座禅の延長で仏教や漢学を学び知識を深めた文人として周囲から頼りにされていました。ちなみに正三が使っていた号「塵中庵不染」には、「本当の風流というものとは塵の世の中にあるもの。その中で塵に染まらないうで生きたい」という想いがあるそうです。

正三が林申と出会ったのはその頃で、意気投合した二人は盛岡芸妓の芸能育成や盛岡の芸能振興に力を合わせました。

正三の功績として真っ先に挙げられるのが、盛岡芸妓の伝統芸「金山踊り・からめ節」の作詞や、林申の小伝「常磐津林申盛岡掩留記」や「盛岡明治舶来づくし」の編集です。ほかにも、幡街・本街の料亭経営者や有志に働きかけて地唄・舞踊稽古場を造らせたり、盛岡芸妓の芸能を共進会などに推薦して上演させたりしたそうです。

伝統芸の代表作

◆常磐津「松島」

作詞は河竹黙阿弥、作曲は六世岸澤式佐。不仲だった常磐津宗家との和解を機に、岸澤が明治17年に作った曲で、景勝地として名高い松島を題材にしたといわれています。松島の四季の美しさが伝わるもので、金屏風の前で歌われる祝い唄とか。

常磐津とは…

「常磐津節」の略で、浄瑠璃の一種。日本の音楽は、メロディーやリズムなどに重点を置く「歌い物」と、歌詞の内容(物語)に忠実に音楽を奏でる「語り物」の2つに大きく分けられます。浄瑠璃

◆長唄「杜の眺め」

盛岡音頭の作詞家がつけた、盛岡ゆかりの長唄。

長唄とは…

三味線音楽の一種。歌舞伎舞踊の伴奏音楽として誕生し、その後浄瑠璃を取り入れて発展しました。歌舞伎などの劇の効果音楽、舞踊の伴奏音楽、舞台から独立した唄物音楽の3種類に分けられます。

◆金山踊り・からめ節

秋田県の「鹿角からめ節」と、紫波町の「佐比内のからめ」がルーツ。鹿角も佐比内も藩政時代は金山で、金鉱石をザルで精選するしぐさが特徴の踊りです。これを元唄にして橋正三が歌詞を補足したり振りを統一したのが、「金山踊り・からめ節」となりました。盛岡芸妓勢揃いの時には必ずこれを披露します。

◆長唄「秋色種」

あきのいろくさ

弘化2(1845)年、麻布にあった盛岡藩邸新築祝いに披露された長唄の名曲。南部家第三十八代当主・利濟公または南部家第三十六代当主未亡人の作詞、十世杵屋六左衛門の作曲とされています。



義太夫節とは…

浄瑠璃の一種で、竹本義太夫が集大成したものの。義太夫は「播磨節」を習得したあと「加賀節」の始祖・宇治嘉太夫にも弟子入りし、両方の浄瑠璃語りとなって大坂に「竹本座」を旗揚げしました。播磨節の語りを基本としながら他派の長所などを幅広く取り込んだことから表現が多才で、当時絶大な人気を誇りました。

常磐津節が重厚・軽妙を兼ね備えた音色の中、棹三味線を使うのに対し、義太夫節では重厚な音色の太棹三味線を使います。

【盛岡芸妓・豆知識】

芸妓についてのあれやこれや。
ちよつとした物知りネタをご紹介します。

料金はどうなの？

芸妓をあげて遊ぶための料金のことを、花代または玉代と言います。昔、芸妓の卵を「半玉」と言いましたが、それは「玉代が半分の半人前」の意味から付けられました。

また花代のことを「線香代」と言うこともあります。それは芸妓がお座敷にあがつている時間を線香で計り、「線香1本で●円」と決まっていたから

です。函番があつた頃には、芸妓に声がかかると函番に線香を立て、その火が消えると使いの男性が料亭に芸妓を迎えに行きました。函番がなくなつてからも、お座敷で線香を立てて時間を計っていた粋な旦那衆もいたそうです。ちなみに戦後は時間制になつたもののあまり厳密ではなく勢いで朝まで遊ぶこともあつたとか。現在は宴会やイベント等で依頼できますので市内の料亭やホテルなどにお問い合わせください。

名前はどつやつて決めるの？

昔は踊りや常磐津など邦楽の世界で名跡を継ぐこともあつたので、本名以外を名乗ることもありましたが。戦後は本名で統一されました。現在は漢字をひらがなに変えて名乗る場合もあれば、芸名を名乗る場合もあるようです。



着物やかつらに決まりはあるの？

正月には正装として紋付きの着物を着ますが、それ以外のふだんのお座敷では季節や気候に合わせた着物を着ます。例えば、6月は単衣、7、8月には袷、9月から再び単衣、といった具合です。もちろん着物はすべて自前。それだけ買えるほど収入が多い時代があつたわけです。

また髪型は、昔は自分の髪を使つて結っていましたが、戦後になるとかつらも使うようになりました。これも昭和30年代で30、40万円もしたという高級品でしたが、今も現役の芸妓も当時は一人で何個も持っていたそうです。

お座敷での心得は？

お客様と話をする時には、基本的に聞き役。また、先輩の芸妓がお客様と話をしている時には邪魔をしない、というルールもありました。

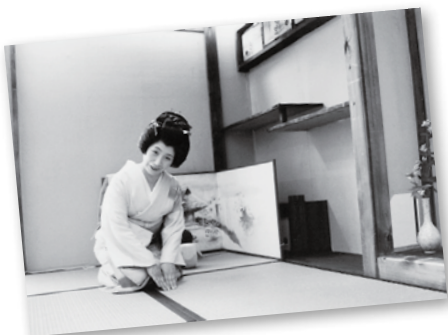
さらに、お酒を飲んでも食べ物は一口口にしないのが基本。たとえお客様に「一緒に食べよう」と言われても、先輩の芸妓が手を付けるまで食べてはいけませんでした。

お座敷遊びってどんなことをするの？

現代のジャンケンやハンカチ落としのような、誰でもその場で簡単にできる遊びがほとんど。共通するのは、負けたらお酒を飲むこと。そのため芸妓の中にはお酒が強い人も多いようです。

「粋なお客様」とは？

昔は、常磐津や清元を習っていてその一部を座敷で披露する旦那衆が少なくなく、「粋なお客様」の代表でした。現代ではそんなお客はなかなかいないようですが、昔も今も変わらず人気があるのは、話題が豊富な人だから。



盛岡芸妓の今とこれから

◆現役は7人

世情や経済情勢の変化などで全国的に花柳界が衰退する中、盛岡では近年盛岡芸妓の活躍の場である料亭が廃業し、盛岡芸妓の数も減りました。これまで現役で活躍していたのは、てる子姐さん、よう子姐さん、治子姐さん、あき子姐さん、てい子姐さんの5人。昔の「函番」や他の地域に残る置屋制度はなく、全員が個人事業者で、八幡町・本町の区別なく「盛岡芸妓」として活動しています。

そして、平成24年10月20日に新たに2人が増え、現在は7人となりました。

若い2人が入り芸を受け継ぐ一方、それぞれが日本舞踊や長唄、鳴り物などの芸道を極めており、中には弟子をとって指導している人もいます。

◆盛岡芸妓への出演依頼

そんな盛岡芸妓の芸を鑑賞するためには、会場となる料亭やホテルに依頼するのが一般的です。料金は謝金のほか、車代等が必要な場合がありますので、あらかじめ会場に確認しておきましょう。

◆後継者の育成

かつて芸のレベルで全国的にも名を馳せた盛岡芸妓ですが、高齢化と後継者難でその継承が危ぶまれています。

後継者難の大きな理由は、一人前の盛岡芸妓になるまで厳しい稽古が必要のため、収入を確保しながら稽古を続けるのが難しいこと。そこで、平成22年度から盛岡市は国の「ふるさと雇用再生特別基金」を活用し、修業期間中の就業支援に取り組み始めました。芸妓修業中に民間企業に雇用される形で稽古に打ち込める環境を整えるというもの。賃金や稽古費用の一部を同基金活用により負担します。こ



治子姐さん



よう子姐さん



てる子姐さん



てい子姐さん



あき子姐さん



とも千代姐さん



富勇姐さん

れによつて見習い芸妓を採用し、育成事業がスタート。平成24年4月から「生涯現役・全員参加・世代継承型雇用創出事業」を活用し芸の修業を積み重ね、同年10月に盛岡芸妓「富勇」「とも千代」2人が誕生したのです。

さらに、平成27年度から盛岡市の補助を受け、盛岡芸妓後援会が盛岡芸妓見習い「ひよ妓」の育成を開始。2名が選考され、稽古に励んでいます。平成28年6月には、それぞれ「喜久丸」「まり佳」と芸名をお披露目。踊り、長唄、常磐津など芸と合わせて料亭での就業研修も行いながら、7人の姐さん方と共に座敷での活動も行っています。

かつての伝統を守りながらも、時代の変化に合わせながら「盛岡芸妓」の技と心を継承すべく、新たに生まれたひよ妓たち。この文化を支える土壌の育成もまた課題の一つといえます。

◆継承に向けた後援会の支援

若い芸妓たちが着々と育つ一方、花柳会が衰退し



盛岡商工会議所新年交賀会にて芸を披露



お座敷体験講座では、「金山踊り」などの踊りの披露、「金毘羅船々」などの遊びを体験

ている現在ではお座敷の仕事だけで安定した収入を得ることが困難です。着用する着物やかつらなどの経費もかかるほか、常磐津の人間国宝・常磐津英寿師を招いた年1回の指導に伴う経費など、現役の芸妓たちが、芸を磨く活動の継続的支援も重要です。そこで、平成24年3月に「盛岡芸妓後援会」を設立。後援会会員が芸妓を招く際のお花代補助を行うほか、市民向け企画や広報事業などの振興策を進めています。平成28年度は、一般向け「盛岡芸妓お座敷体験講座」を5回開催。お弁当や茶菓付の気軽な会費でお座敷を体験できる企画として多くの方に参加いただきました。また、後援会会員や一般客が手軽な予算でお座敷遊びができる「盛岡芸妓公開講座」も好評です。お座敷体験は観光客向けの着地型観光メニューとしても魅力的なコンテンツ。まずは、盛岡の芸妓文化をより多くの方に知ってもらう機会に努めています。

さらに、継承という視点から映像や音源のデジタル保存、広報事業ではWEBサイトやSNSを活用した情報発信などにも取り組んでいます。

盛岡の貴重な文化である盛岡芸妓を次世代に継

承していくため、より多くの後援会加入者を募集しています。



未来へと受け継がれる盛岡芸妓の文化

《ひよ妓インタビュー》

芸妓として独り立ちをめざし、稽古に励む「ひよ妓」の二人。日々学んでいること、将来への思いなどをインタビューしました。

—芸妓になろうと思ったきっかけは？

まり佳／新聞で募集記事を見た母から、「やってみたら」と勧められて。子どもの頃に聖石の民舞『南部よしやれ』を踊っていたので、興味があると思ったようです。迷いはなく直感的に選んだ感じでした。喜久丸／私も母が募集のポスターを見つけて。締切り当日だったので、直接応募書類を届けてほしいたのを覚えています。やはり就活中でしたが、「これもチャンスの一つ」と思いました。

—稽古ではどんなことを学んでいますか。

まり佳／基礎的な踊りの手順を覚える段階から、より細かなところを身につける段階に移っているので大変です（笑）。お客様から「扇子を回すの、一人だけ早かったよ」などご指摘を頂くことも……。でも、きちんと見て下さることを有り難く思います。喜久丸／一つの踊りでも、基本の曲に対してどんな伴奏（楽器）が入るかで節回しも変わりますし、一部分だけを躍る場合もあって。それを一つずつ覚え



上／喜久丸さん
平成4年7月生まれ（血液型／O型）。盛岡市出身。岩手大学卒業。小学時代から吹奏楽をはじめ、中学からはコントラバスを担当。大学ではオーケストラに所属。ここぞという低音を奏する時、心がぞくぞくと話す。

下／まり佳さん
平成8年5月生まれ（血液型／O型）。聖石町出身。白百合高等学校卒業。小学時代は野球、中学・高校時代はソフトボールを続けてきた体育系女子で、現在も朝野球チームに所属。マンガを読むのも好きで、愛読書は『幽遊白書』。

盛岡芸妓の素晴らしい芸は、盛岡の暮らし文化に培われて伝承されてきた盛岡ブランドのひとつです。このたび、盛岡芸妓の歴史と文化を広く市民の皆様にお伝えしようと、本冊子をまとめました。本冊子をご活用いただき、後継者育成や芸の継承につきましても、多くの皆様のご理解とご支援をお願いいたします。

盛岡芸妓後援会

《盛岡芸妓後援会》

盛岡芸妓後援会は、盛岡の貴重な文化である盛岡芸妓を次世代に継承していくことを目的に、平成24年3月2日設立されました。

発表会や盛岡芸妓との交流会の開催、お花代の補助事業などを行っています。会員は随時募集しておりますので、入会ご希望の方は、盛岡芸妓後援会までご連絡をお願いいたします。

【会費】 法人会員 1口 (30,000円)以上
個人会員 1口 (10,000円)以上

【問い合わせ】盛岡市清水町 14-12 盛岡商工会議所内 tel.019-624-5880

詳細は www.ccimorioka.or.jp/geigi/  盛岡芸妓後援会

■発行／平成29年3月

■発行／盛岡芸妓後援会

■問い合わせ／盛岡商工会議所内「盛岡芸妓後援会」(盛岡市清水町 14-12 tel.019-624-5880)

■協力／盛岡市

■制作／有限責任事業組合 まちの編集室

■写真出典・提供／「盛岡劇場ものがたり」、てる子姐さん

■参考文献／「盛岡劇場ものがたり」(岩手日報社、川口印刷工業)

「ひだりづま」及川和哉 著 (八重岳書房)

「もりおか物語 (貳)―八幡町かいわい―」(熊谷印刷出版部)

るのは大変ですが、目線の向け方などの表現も難しいです。バイト先で、無意識に頭の中で曲を繰り返ししていたりします(笑)。

―初めての体験も多いのでは？

喜久丸／お稽古はもちろんですが、八幡宮の豆まきに参加したり、日本文化や風習を改めて学んでいます。学生時代に知る機会がなかった盛岡の良さもいろいろな場で感じます。

まり佳／姐さん方は地元の神様や仏様を大切に、伝統的な風習や季節ごとの行事も、いろいろ教えてもらいました。出かける時に火打ち石を鳴らしてもらうと、気持ちも背筋もピンとしますね。

―芸妓の世界で学ぶ今、の思いは？

まり佳／実はよく知らずに入った世界。でも、知る程に盛岡が全国に高く評価される芸どころだと感じ

ます。踊りだけでなく、お客様との会話のしかた、ふるまいなど、一つひとつが勉強です。

喜久丸／姐さん方からは「芸あつての盛岡芸妓」と指導を受けています。お酌や会話だけでなく、芸を見てもらえる芸妓になるようにと……。華やかさの裏に、芸を学ぶ厳しさがあることも知りました。

―将来はどんな芸妓になりたいですか？

まり佳／まずは踊りや三味線をお客様から褒めてもらえるよう、しっかり身につけたいと思います。盛岡弁もまだまだ。ずっと自然に出てくるようになりたいです。

喜久丸／私も芸を第一に見てもらえる芸妓をめざします。そして、姐さん方のように、お客様に対する気配りも少しずつ経験を積んでいきたいです。

(取材日・平成29年3月)

金山踊り・からめ節



（ハア ドッコイ ドッコイ ドッコイナ）

／からめ からめと おやじがせめる

／なんぼからめても からめたてならぬ

（ハア ドッコイ ドッコイ ドッコイナ）

／からめた千貫 おやじの借金年賦ですませよ

（ハア ドッコイ ドッコイ ドッコイナ）

／金の牛コに 錦の手綱

／俺も曳きたい 曳かせたい

（ハア ドッコイ ドッコイ ドッコイナ）

／からめて からめて しつかりからめて

／握った手綱を うっかり放すな

（ハア ドッコイ ドッコイ ドッコイナ）

／田舎なれども 南部の国は

／西も東も 金の山

（ハア ドッコイ ドッコイ ドッコイナ）

／どつしり掘り出せ お国の名物

（ハア ドッコイ ドッコイ ドッコイナ）

／金が出る出る 白金 黄金

／鉄も鉛も 赤銅も

（ハア ドッコイ ドッコイ ドッコイナ）

／かねつる千年 からめは万年

（ハア ドッコイ ドッコイ ドッコイナ）

／めでためてたの 若松よりも

／盛るお山の 黄金華

（ハア ドッコイ ドッコイ ドッコイナ）

／ドッコイ千両 ドッコイ万両

／ほりだせ ほりだせ ほりだすお金は

／岩手の花だよ ドントほりだせ

（ハア ドッコイ ドッコイ ドッコイナ）